

『峯相記』小考

―峯相山と伊和大明神と書写山と―

井上 舞

一、はじめに

『峯相記』は中世南北朝期に成立したとされる、播磨の地誌である。貞和四年、播磨国揖保郡峯相山鶏足寺を訪れた一人の旅僧が、この寺に住む旧知の老僧と再会し、勧められるままに逗留を決める。その夜から翌日にかけて、旅僧が尋ね、老僧が答える、という形で、播磨に関するさまざまな出来事が綴られていく。その内容は、あるいは宗教のことであったり、歴史であったり、また社会情勢であったりと多岐に渡り、中世播磨の様相をうかがい知ることのできる貴重な文献である。本作品は、江戸の頃にはすでに知識人たちの手によって解釈がすすめられ、今日に至るまで、文学・史学・郷土史等、さまざまな分野で研究されてきた。にも関わらず、その執筆意図や作者像など、いまだ不明瞭な部分も多い。

近年、各務健司氏によって、改めて諸本の整理と系統付けがなされ^(注1)、また、大山喬平氏が作品全体についての考察を行い、国衙と地域との関係を視野に入れつつ、『峯相記』を「日本における地域史叙述の先駆け」と位置づける論考を発表されてい

る^(注2)。さらに、郷土史研究の場においても、西川卓男氏が『峯相記』の全編口語訳を発表されるなど^(注3)、本作品の研究は活発になってきている。

今回、本稿で取り上げるのは『峯相記』が載せる、峯相山鶏足寺・書写山円教寺・一宮伊和大明神の縁起である。鶏足寺は『峯相記』発信の場であり、書写山と伊和大明神は、当時の播磨における寺社の筆頭である。このうち、鶏足寺と伊和大明神については、山口真琴氏によって詳細な研究がなされ、これを極端な「国衙中心主義」の上に成り立った、「播磨ナショナルリズムとしての寺社縁起」、と位置づけられているのだが^(注4)、これらもふまえつつ、三つの寺社縁起についての私見を述べてみたい。

二、峯相山鶏足寺

『峯相記』の本文は、九つの問答によって構成され、大山氏はこの問答の内容を、第一問「生死出離の巻」、その1・第二問「生死出離の巻」、その2・第三問「鶏足寺の巻」・第四問「所

々靈場の巻」・第五問「当国社頭の巻」・第六問「郡郷田地の巻」・第七問「当国古事の巻」・第八問「惡党蜂起の巻」・第九問「元弘以後の巻」と分類されている(注5)。本稿でも氏の説に従い、以下、引用の際にはこれらの巻名を用いることにする。

その内容であるが、まず、冒頭で少し触れた、旅僧と老僧の再会が描かれた後、それぞれ第一問では日本国内の仏教宗派の開基者とその教義、第二問では老僧と旅僧の出自が語られる。次に、問答の場を常行堂に移した後、旅僧の「抑モ当山ハ建立以後、星霜幾程ヲ經テ候ゾヤ」という問いかけによつて第三問「鶏足寺の巻」に移行するのだが、播磨に関する記述は、この峯相山鶏足寺の縁起よりはじまる。

当寺ノ起リ遠キ哉、神功皇后三韓ノ異國ヲ攻メ給ニシ時、新羅國ノ質子王子ヲ取り帰給ヘリ、王子云ク、渡海ノ間、風波ノ難ナク日域ニ付給バ、一伽藍ヲ建立セント、皇后仏法ノ是非ヲ知給ハネバ、分明ノ勅答ナカリキ、筑紫ニテ皇子降誕ノ後、帰洛ノ時、尚西戎ヲ怖レ給フ故ニ副將軍男貴尊ヲ当國留メ置キ給シニ、彼王子ヲ預ケ奉ラル、王子当山ニ攀登リ、草庵ヲ結テ一心ニ千手陀羅尼ヲ誦シ給フ、數百年ヲ經給ヘリ、敏達天皇御宇十年、野芹沢構ヲ加ヘ鉞斧潤飾ヲソヘテ、一堂ヲ建立シテ王子入滅畢、(略)空也上人數年籠山、金泥ノ法花經ヲ延長二年十二

月二日施入、性空上人一夏籠山、法花經一部永延年中施入、阿聖ノ筆跡今ニ之有云々

神功皇后が新羅征討の際に連れ帰つた新羅の王子によつて、鶏足寺が建立されたというこの縁起は、『日本書紀』及び『播磨国風土記』の神功皇后の三韓征伐に関する伝承を核に成り立っている。多田圭子氏によれば、神功皇后に関する伝承は、平安時代には特に広がりを見せず、むしろ記紀にはない形で發展してくるのは、中世に入つてからだという(注6)。となれば本縁起は、山口氏も指摘されているように、そう古い時代に成立したものではないと思われる。同氏はこの縁起について、「さながら百済の聖明王による仏教公伝説に競うかのごとく、この鶏足寺を中心とした古代播磨仏教の先駆的な正統性を誇示する意図」が見え、「まさにもうひとつの日本仏教のはじまりを喧伝するかのよう」な「驚くべき播磨ナシヨナリズム」、と評されている(注7)。また、縁起中に登場する「新羅王子」や「副將軍男貴尊」と、『播磨国風土記』との関わりについても言及されているのだが、それについては後述の伊和大明神縁起の項で触れることにする。

さて、開創縁起の後には「神護慶雲ノ比」の堂舎の様子から、貞観に至つて寺内に市が立つたこと、伴善男が当地に配流されたことなどが記され、次に、傍線部、空也と性空が鶏足寺を訪

れた、という逸話が記される。

この二人の籠山には根拠となる文献が存在していて、まず『空也誄』には、「播磨国揖保郡有峯合寺、有一切経論。上人、住彼道場、披閱教年。若有疑滞、夢有金人、常教文義。覺後問智行之倫、果而如夢。」(注8)とある。この「播磨国揖保郡有峯合寺」が峯相山鶏足寺を指すことはいうまでもない。石田義長氏は『空也誄』中の記事に関連して、『峯相記』の記述にも言及されている。それによれば、『空也誄』の記す一切経の披閱に関しては、あり得る話としつつ、『峯相記』の記事には、延長二年(九二四)時点の空也の年齢が二十二歳であることから、「若年の遍歴修行者である一沙弥が、貴重な金泥の経巻をどうして写経することができたのか。あるいは、空也の出自が高貴の血筋であり、経済的にも彼を支配する強力な背景があったとすれば、この記述を真実とすることも可能かもしれないが、後年の京都市中での乞食教化の姿からそれを想像することは困難である。」と、否定的な意見を述べられている(注9)。

また、性空の籠山に関しては、書写山の寺記『播磨国飾磨郡円教寺縁起等事』(以下、『縁起等事』と略す。)所収の縁起に該当する記述がある。『兵庫県史史料編・中世四』の解題によれば、『縁起等事』は「性空の滅後、円教寺の支配をめぐって国衙僧義算と性空直弟延照の間に相論が生じた。(略)この相論に際して作成された寛弘七年(一〇一〇)九月十日付の「聖者門徒起

請事」を主とし、それに性空の略系、承久二年(一二三〇)六月の講堂修造勸進状などを加えたもの」だという。よって本書の成立は承久二年以降と考えられるのだが、問題の縁起は「聖者門徒起請事」の中に含まれており、縁起したいはかなり早い時期に成立していたものと思われる。この縁起は、他の書写山縁起と全く異なる本文を有しており(注10)、それについては別途考察が必要なのだが、正安二年(一二三〇)成立の書写山の寺記、『性空上人伝記遺続集』(以下、『遺続集』と略す。)は「縁起云」として、たびたび『縁起等事』所収縁起を引用しているので、書写山の資料としては一定の信頼がおけるものと判断する。

『縁起等事』所収縁起によれば、性空は書写山に草庵を構えた後、背振山↓伊与国↓書写山↓伊与国と移り住み、さらに「三ヶ年後依門徒奉恋、来坐当国峯相山鶏足寺、一夏之後、移坐此山」という。「此山」とは書写山のことを指す。法華経を施入したという記述はないものの、性空が一夏の間鶏足寺に籠もったことについては、ここに明記されている。しかし、先程述べたように、『縁起等事』所収縁起の本文は独特のもので、管見のかぎり、現存する他の書写山の寺伝及び文書類には、峯相山鶏足寺の名を見いだすことができない。

ここで記事の実否を問題にするつもりはないが、仮に二人の籠山が事実であったとしても、ここに挙げられている記事は外

部の諸伝に基づいた創作であろう。その際に典拠になったのは、『空也誅』に準ずる諸伝であるいは『縁起等事』の記事であり、鶏足寺側はこれを縁起に取り入れる際、經典の施入という具体的事項と、その時期を明記することによって、読み手に対する信頼性を高めようとしたと考えられる。「年記等分明ナラ」ぬ寺伝の多い鶏足寺にとつて、空也と性空という名の通つた宗教者が逗留したという「事実」は、ぜひとも寺史の中に取り込まなければならぬ記事だつたのではないだろうか。

三、一宮伊和大明神

さて、鶏足寺を開いたのは新羅から連れてこられた王子であるが、その王子の身柄を預かつた「副將軍男貴尊」もまた、播磨の地で神として祀られている。『峯相記』第五問「当国社頭ノ巻」の冒頭には、播磨八所大明神の筆頭、播磨一宮伊和明神の縁起が記される。

一宮伊和大明神者、素盞男尊第一ノ皇子、男巳尊、白山妙理權現ト顯レ坐ス、愛ニ神功皇后三韓ヲセメ給シ時、副將軍トシテ彼ノ戦場ニ向ヒ坐ス、静謐ノ後、皇后帰洛ノ時、尚異賊勝ニ乗ル事アラバ、中国ノ諸神ヲ相催テ責戦ベキ由、御約諾ヲ蒙リ、神勅ニ随テ、当国神戸ノ地ハ

四方山ヲ廻テ、河ノ流レ谷ノ口、無双要害タル間、此陣ヲ取テ後、薨卒ノ跡ヲ顯シ坐ス、其後數百年ヲ経テ後、師安元年、伊和恒郷ニ託シテ、此地ニ我ヲ崇ベシト云々、夢ニ驚テ居屋ノ西ノ野ヲ見ルニ、一宿ヲ経テ、數千本松相生並ベリ、群靈多飛來テ、近辺在家ヲ焼松ヒ、清淨地ト成テ、大ニ白キ靈ルニツ北ニ向テ眠リ居ケリ、其ノ跡ニ北向ニ神殿ヲ造リ始ム、(後略)

この縁起の内容が、先述の鶏足寺の縁起と重なっていることは明らかである。山口氏も指摘されるように、鶏足寺縁起の「副將軍男貴尊」及び伊和大明神の祭神「大巳尊」は「男巳尊」と同一神であると考えられ、以下、本文の引用等特に必要でないかぎり、表記を「男巳尊」に統一する。この縁起には「播磨神戸在留からやはり數百年後というのは、先の新羅王子伽藍建立の話とよく符号して、まさしくこのオホナムチ伊和大明神こそがかの王子を預かつたというにふさわしい設定」(注1)がなされているのだが、順序からいえば先に成立したのはこちらの伊和大明神縁起のほうだろう。この縁起中の「師安元年」とは九州年号の一つとされていて、日本の年号に照らし合わせると「欽明天皇二十五年」にあたるのだが、実は伊和大明神の縁起にはもう一説あつて、『播磨万宝智恵袋』所収の「播州伊和之社縁起」や『兵庫縣神社誌』の載せる「正一位伊和大明神縁起」には、

成務天皇御宇の開創とする縁起が記されている。こちらの縁起では、男己尊に関しては『日本書紀』における男己尊の伝説を記すのみで、当社は神功皇后が三韓征伐に向かう際、戦勝を祈願した社であると主張している。『峯相記』が「師安元年」開創説を採ったのは、むしろ鶏足寺縁起との関わりを考へてのことだろうが、しかし、播磨国一宮である伊和大明神と、一寺院である鶏足寺がこれほどまでに内容の一致する縁起を有することは、この寺社の関係においてどういった意味を持つのだろうか。

鶏足寺縁起の項でも少し触れたが、山口氏は鶏足寺を建立した「新羅王子」のモデルについて、『播磨国風土記』に登場するアメノヒボコを想定されている。そして、伊和大明神が、国をめぐってアメノヒボコと戦った伊和大神と葦原志挙乎命（＝男己尊）の融合した姿であることもふまえて、

「アメノヒボコを原像とする『峯相記』の新羅王子の場合は、伝来されたというよりは、直接に神功皇后が戦利品のように新羅仏教を持ち帰ったという意味で、その受容関係にかなり日本の優越性を潜ませているのではないか。」

「その王子の身柄を託されるのが、『播磨風土記』の世界では客神アメノヒボコと対した播磨一宮の伊和大明神であるという構図は、日本の対外的なそれをも背負い込むことで、播磨にとって二重のナシヨナリズムを刻んでい

ることになる。」（注12）

と述べられている。この二つの縁起の根底に、山口氏の主張される「播磨ナシヨナリズム」の精神が流れているのは確かだとしても、伊和大明神側はともかく、その対になる縁起を鶏足寺が有していることについては、いま少し考える必要があるのではないだろうか。

この二つの縁起を見るかぎり、やや伊和大明神側に優位性が認められるような気がするが、それはさておき、縁起によれば、伊和大明神の祭神男己尊は、当地に降り立った際、「白山妙理権現ト頭レ」という。「白山妙理権現」とは加賀国一宮の白山比咩神社の祭神白山比咩神を指すが、この神は、書写山円教寺とも関わりを持っている。

四、書写山円教寺

書写山円教寺は「公家・武家ノ御願所」である、播磨天台六ヶ寺の筆頭寺院である。『峯相記』では寺院の縁起は第三間「鶏足寺の巻」に続く第四間「所々霊場の巻」で語られ、書写山縁起はその冒頭に示される。その記述量は、他の記事に比べて膨大で、開創縁起のみならず、当代（貞和四年）に至るまでの主要な出来事も記されている。『朝野群載』所収「性空上人伝」から派生した説話群にはない詳細な年代が明記しており、また、

縁起類にのみ残る、性空が書写山に分け入るくだりが描かれていること、堂塔の修理の記事について、間取りなども正確に記していることなどから考えて、当縁起が『一乗悉地菩薩性空上人伝』（以下、『悉地伝』と略す。）をはじめとする書写山の寺記を下敷きに書かれたことは間違いない。とはいえ、『峯相記』以前に成立していた寺記にはない表現も所々に見られ、そのみを利用して書いたというわけでもないようである。加えて、寺記の一つである『縁起等事』所収の縁起が、他の縁起類と異なる本文を持つことはすでに述べたとおりであるが、ここでは、性空の龍山に関する記述はなく、一般によく知られている縁起注¹³の内容のみが記されている。

『峯相記』記載の書写山縁起は、大別して

- ① 性空の出生から書写山の開創まで。
- ② 開創の後、性空の死に至るまで。
- ③ 性空の死後、当代までの主要な出来事。

に分けられるのだが、問題の「白山妙理権現」がかかわってくるのは、①の部分である。前半は性空の出生、元服、出家等の時期と年齢が羅列され、性空説話でよく知られる、生まれた時に左手に針を持っていたり、出家後に霧島や背振山に籠もった際に、経巻の中から粳米が現れたり、化人が一枚の書を授けた

りといった奇瑞は、完全に省略されている。康保三年（九六六）書写山に至るにあたって、ようやく瑞雲が性空を書写に導いたという逸話が示される。

（前略）康保三年ニ上洛、瑞雲影ノ如クニ伴テ身ヲ離レズ、当国府辺ニ一宿シ給フ、明朝ニ彼雲前ニ立ズ、戌亥方ノ高山ニ聳ケリ、聖人雲ヲ尋テ山ニ入ル、爰ニ筑紫ニテ給仕セシ童子乙丸・若丸化来シテ、山路ヲ教ヘ奉ル、又山中ニ異僧一人出現シテ、山ヲバ書写ト名ケ、峯ヲバ一乗ト号ス、此山ヲ踏ム者ハ菩提心ヲ発シ、此峯ニ住ム者ハ六根ヲ淨ム云々、大聖文殊ノ化来也、則草庵ヲ結び、寺院ヲ建立ス、

この後、本文は

第一ニ講堂、寛和二年ニ造テ、感阿造ル釈迦ノ三尊ヲ安置ス、永延元年ニ勅願トス、同十月七日、山門実因僧都ニテ供養畢、第二如意輪堂、天人降り桜ヲ礼シテ云ク、稽首生木如意輪、能満有情福寿願、亦満往生極樂願、百千俱胝心所念云々、亦異鳥来テ囀云ク、奈成不厭、山本草庭、阿耨菩提、乃花応敷ト云々、聖人之ヲ和シ給フニ、ナニモミナ、イトワヌ山ノ木草ニハ、阿耨菩提ノ花ソサクベキト云歌トナル云々、（略）第三ニ白山権現ヲ勧請シテ守護神トス、此峯ニハ正ク閻魔王毎日来給フ云々

と続くのだが、この部分は神栄氏が指摘されているとおり、基になった縁起に比べ、「簡略にすぎ、省略がはなはだしい」(注14)。補足のために説明すると、『悉地伝』等の縁起では、文殊の化身である「化人」(『峯相記』記載縁起では「異僧」とする)が「此山ヲ踏ム者ハ菩提心ヲ発シ、此峯ニ攀ム者ハ六情根ヲ淨ム」(注15)と説明した後、性空に、書写の地にある「三吉処」の場所を教えることになっている。本文中の「第一」・「第二」・「第三」というのはその「吉処」の場所を指す。「第三」の地は性空が六根清淨の証を得た場所で、『悉地伝』では「准胝力峯」と呼ばれているのだが、少し時代が下って、『遺統集』になると、「准胝力峯者、当時白山是也」(注16)と記されており、鎌倉時代には、「白山」と呼ばれていたようである。

この「白山」が『峯相記』でいう「白山権現ヲ勧請シテ守護神ト」した地にあたるのだが、そこで問題になるのが、先程の「男己尊、白山妙理権現ト頭レ坐ス」という一文である。他の伊和明神縁起では、素戔尊と男己尊の関係は明記しているが、白山権現についての記述はない。また、伊和大明神に関して、いくつかの所伝を引いている『播磨鏡』も、白山権現については言及していない。伊和明神は書写山の勧請十二神の一つとして、別途書写山に祀られているのだが、書写山の「第三」の地に関する記述、及び伊和明神縁起の「白山妙理権現ト頭レ坐ス」という一文から考えれば、『峯相記』では、暗に伊和明神が勧請

神の一つなどではなく、「第三の吉処」に勧請された書写山の守護神である、と主張しているようにも思えるのである。男己尊は白山妙理権現説を唱えるのは、『峯相記』記載の縁起だけであることを考えると、『峯相記』には、伊和大明神に対してこれを特別視するような傾向があるのではないだろうか。

五. おわりに

以上、断片的ではあるが、峯相山鶏足寺、一宮伊和大明神、書写山円教寺の縁起について、気づいたところをいくつか述べてみた。鶏足寺は、外部の所伝を利用して作り上げた性空龍山の記事を経起に取り入れ、また第五間で鶏足寺縁起と共通した内容を持つ伊和大明神縁起を引用することによって、声高ではないが、播磨筆頭寺社との関わりを主張している。さらに、これらの縁起には伊和大明神に対する優位性が見ええる。むしろ、これは今回扱った三縁起に関してのみいえることであって、『峯相記』全体を見渡せば、また別の何かが見えてくるかもしれないが、それについては今後の課題としたい。

—注—

(注1) 各務健司『『峯相記』諸本とその受容』(『論及日本文学』七五号)

二〇〇一・一一

(注2) 大山喬平「歴史叙述としての『峯相記』」『日本史研究』四七三号／二〇〇二・一一

(注3) 西川卓男「口語訳『峯相記』」『播磨学紀要』八号／二〇〇二

(注4) 山口真琴「播磨ナシヨナリズムと神功皇后伝説——『峯相記』序説——」

『フログレマティーク』三号／二〇〇二・七

(注5) 大山氏前掲論文

(注6) 多田圭子「中世における神功皇后像の展開——縁起から『太平記』へ——」『国文目白』三二号／一九九一・一一

(注7) 山口氏前掲論文

(注8) 石井義長「空也上人の研究——その行業と思想——」(法蔵館／二〇〇

二・一一) 第二部第二章『空也上人談』の校訂より引用

(注9) 石井氏同著

(注10) 一般に知られている書写山縁起は、『朝野群載』所収「性空上人伝」

に代表される、いわゆる性空上人説話を中心に構成される。この「性空

上人伝」から派生した説話は、出生→元服→出家→霧島での修行→背振

山での修行→書写山開山までが記されており、『悉地伝』等が載せる縁

起は性空の伝記に加え、性空が書写山に導かれた経緯と、講堂、本尊な

どの建立の由来を記している。しかし、『縁起等事』所収の縁起では性

空の生い立ちが記されず、康保三年に性空が書写の地に草庵を構えたと

ころから話が始まっている。後世の寺記によれば、『悉地伝』は「公家

官文ノ書」であり、この縁起は「当山ノ私記」とされていたらしく、本

論でも述べたように、一応「縁起」としては認められていたものの、結局は「悉地伝」を基にした縁起が主流となって伝わっていったようである。

(注11) 『播磨国飾磨郡円教寺縁起等事』『兵庫県史史料編・中世四』所収／一九八九

(注12) 山口氏前掲論文

(注13) 注10を参照のこと

(注14) 神楽越郷『播磨の地誌——峯相記の研究』(郷土志社／一九八四)

(注15) 『一乗悉地菩薩性空上人伝』『兵庫県史史料編・中世四』所収／一九八九

(注16) 私意により書き下した。

(注17) 『性空上人伝記遺集』『兵庫県史史料編・中世四』所収／一九八九

(注18) 『性空上人伝記遺集』『兵庫県史史料編・中世四』所収／一九八九

八九

※ 『峯相記』本文引用は、すべて『兵庫県史史料編・中世四』所収の斑鳩本による。尚、引用にあたっては、濁点を施す等、適宜私意に改めた。

※ 本稿は徳島大学国語国文学会第三十一回研究会(平成十六年十一月二十日)における口頭発表『『峯相記』記載の寺社縁起について』に加筆修正したものである。